
cherry blossom

K-poco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

cherry blossom

【コード】

N9553R

【作者名】

K-poco

【あらすじ】

入学式に出会ったふたり。

やんちゃかつ優しいゆう。

おしとやかかつ純粋なみく。

そんなふたりに襲いかかるたくさんの壁!!

ふたりはどう乗り越えるのか!

ありそうでなかなかない恋愛ストーリー

ゆう

「ゆうっ！！今日から学校でしょ！？入学式から遅刻するつもり！？」

耳元で声が聞こえて俺は飛び起きた。

「う…わっ母さん！勝手に部屋入ってくんなよ！！」

中2の夏から俺の部屋には勝手に入るなって約束してのに…

「何言ってるの！私が入ってこなかったらあんた入学式間に合わなかったじゃないの！」

「うわっ！！今日入学式じゃんよ！ってあと10分もねーじゃんっ！！」

布団からすぐ出た俺は寒さで体が大きく震えた。

あーそっか…だから母さんが化粧してたんだ。それにレディースーツ…似合わね。

いつもエプロン姿しか見んねえからな…

そんなこと思いながら俺は部屋のクローゼットに掛けてあったシワ1つない綺麗な制服をとった。

「ったくもつと早く起こせよな…」

母さんをちら見すると思いつきり睨まれていた。

「さつき部屋に入ってくんなって言ったの誰かしら？」

俺の肩に殺気だった小さな細い手の圧力がのしかかる。

「はい…すいません…痛いっす…」

正直あんま痛くねえけどここは謝っとかねえと…

「はいよろしい。」

肩から手が離れたと思ったらドアが開く音がした。

「あつちよっ母さん、ごうは？」

慣れないネクタイを締めブレザーをはおった。

「ごうならもう30分前にも家を出ましたよ。」

ドアが閉まったと思ったら階段を下りる音が聞こえた。

ここのやつ…起こせて言ったのに…

俺は制服を少しくずして着るとドタドタとあらあらしく階段を下り洗面所へ向かった。

途中親父の怒鳴声が聞こえたけどどうせ静かに下りるだろ…

鏡の前に立つと鏡の下にずらっと並んだワックスの1つに手を伸ばした。

青のワックス。俺はこれしか使はない。あとの5個はここのだ。

ワックスを手に取り短めの髪をツンツンにたてる。ツンツンと言っても緩やかにツンツン。

中1からこの髪型だからワックス塗んのも手慣れたもんだ。

ワックスを塗り終わると水で顔を洗った。冷たさからきた寒さで体が震える。

歯をさつさと磨くと俺は玄関へ行った。ハイカを履くと玄関にある全身鏡を見た。

腰パン、シャツだし、ゆるゆるのネクタイ、そしてブレザー、遊んだ髪。キマってる。

「ほら、一緒行くわよ。あら…やっぱり双子って似るのね。」

母さんがヒールをコツコツ鳴らしながら玄関をでた。

「ちよつとまでよ！さっきの言葉どうゆうことだよ」

母さんのとこまで小走りで行くと、俺は持っていたスクバをリュックのようにからった。

「こつも同じような格好をしてたわ。髪は違うけど」

「そうね。」

たしかにな…俺とこつは性格とか似てるからな…

「髪はこつの方が長いだろ？」

「そうね。あんたは肩につかないものね。こつは肩より長かったわよね。」

たったそんだけの話しをしていただけなのに高校に着いた。

『南風丘高校』って石に彫ってある門を通る。

南校は俺ん家から1分もたたないくらいで着く。だつてすぐ隣りだし。

「ほら！生徒並んでんじゃない！！早く行つてきなさい！」
母さんの細い手が俺の背中に衝撃を与える。

「いつて…はいはい。行つてきますよ」
背中を抑えながら小走りで走つていく。

「こら！田村！！入学式そうそう遅刻とはどうゆうことだ！！」
は？誰だよ間に合つてんじゃないかよ。イライラをかかえ声が聞こえた方を向いた。

「あつてメー！こつ！お前かつ！」

「はいはいこつですよー。騙されてやんの」

こつが俺んとこまで来て俺の顔を覗きこんできた。

あーむかつく…俺を見てるみたいで…

「こつお前起こせつて言つたる？」

こつの肩に手を置いて寄りかかる。

「ゆう…相変わらず寄りかかんの好きな。起こしたけどお前が起きなかつたんだよ」

「んなわけねえ！絶対起こしてねえ！」

そう言いながら俺はこつの首に腕をまわし思いつきり乗つかった。

「お前なにおんぶしてんだよ！重てえつて！！」

2人の笑い声が校舎に響く。

「おら！お前から静かにしろー。適当に並べー！」

先生らしき男が俺らを向いて言う。

「あつそーだゆう！お前自分が何組か知ってる？」

「知らねえ後で発表するらしいぜ」

「ふーん。俺とお前が同じクラスってことだけは知ってるぜ。」

「双子なのにか…？」

ゆう (後書き)

まだまだ続きはあります！

でもなかなか続きを投稿しないと思います…

ゆうとみくの交互小説なんでどちらかが完成したら載せる、完成したら載せるを繰り返すんで遅れます…

すいません…

つてか読んでくれた人…ありがとうございます！

みく

「みくーよかったあ！」

中学からの友達が私に抱きついてきた。

「ホントよかったよ！同じ高校入れて！」

私も抱きつく。

「さりなー今日の入学式でいい男見つけんの？」

さりなの体から離れる。

「もうみくそんな大丈夫！？的なヤバ顔しないでーかっこいい人見つけるだけ。」

よかった。さりなの笑顔を見るとつい安心しちゃう。

「ギャハハハハハハハハハ」

前からすごい笑い声が聞こえた。

笑い声が聞こえる方を見ると男子2人がおんぶして暴れていた。

「ねえ、行ってみようよみく！」

「ええ？」

いきなり私の手が引つ張られ笑い声のもとへどんどん近づく。

「ちよつさりな！いいって私は！」

結局私の反対もむなしく笑い声のもとに着いてしまった。

やばい…かっこいい…

そこで短髪のちよつと荒れてるっぽい男子が目に入った。

「みくあの人かっこいい。」

耳元でさりなの声が小さく聞こえた。

どうしよう…聞くの怖い…もし私と同じ人だったら…

「だ…誰？」

勇気を出してさりなの耳元でかすれた声で言った。

たったちよつとの言葉なのに自分でも声が震えたのが分かった。

「あのゆるパーマっぽい人ー！下の人！」

さりなは頬を赤くして口を手で抑えていた。

「え？あのツンツンの下？肩まで髪のある……」

ツンツンのかっこいい人の下に指を指した。なんだか顔…ツンツンの人に似てない？

「そおだよ？かっこよくない？ツンツンはちよつとガキっぽーい！」

「そ…そっか…私はどっちかと…うん！どっちも無理！」

嘘ついた。そおだよ…さりなは大人びてるから、大人っぽい下の人がいいんだ。

そんなさりなに上の人がかっこいいなんて言えない。

「そっかあ…でもこんなに男いるんだから現れるよ！」

さりなの左手が私の右手を包む。それに私もこたえる。

「あの2人かっこよくない!？」

いきなり後ろから女子の声が聞こえた。

「たしかにー！私狙っちゃおうかな！」

うそ…そんなに人気なの？

「うしろやな感じ。」

さりなの唇が少し耳たぶにふれる。

私は首を縦に振って後ろの女子の話しに耳を傾けた。

「狙う!？無理でしょー！」

「ええ!？なんで!？」

「あの2人中学の頃からすっごく人気でいつも違う女子連れてたし、しかも連れてたわりには1人も彼女じゃないって！」

「なにそれたらしかよー！」

「でもあの2人なら遊ばれてみたい！」

「うちもー」

「どっちがかっこいい？」

「うち髪長い方！」

「私ツンツンー！」

「なんかこの高校に入った女子あの2人の追いかけて入った人が大半らしいー」

「やば！ゲットしたら超いいじゃん。サイコーじゃん！」
「たしかにかっこいいしね！」
「でも顔なんか似てない？」
「あー言われてみれば…」
「情報ゲット！あの2人双子だって！」
「うそつまじ？」
「まじ！ホントに双子！」
「す…すごい噂…遊び人なのかな…」
「噂気にせんどこ！」
さりなの声が聞こえた。
「そっだよ…さりな負けんな！」
さりなの手を強く握ってさりなに笑顔を見せた。
「ねーあの2人名前はなんていうの？」
「また後ろからだ！でも名前は私も知りたい。」
「田村こうとゆうだって！名前もかっこいいー！」
「双子か…ゆうとこう…」
「ねえみく！どっちがゆうでどっちがこうと思う？」
「うーん…」
さりなもすこし悩んでるようだ。さりなの腰に手をまわした。
さりなの腰に触れた瞬間さりながびくついたのがわかった。
「な…どうした!？」
「びっくりしたでしょ？体がぶるってなってた！」
私の腰も生温かくなってきた。長い爪がちょっと痛いかな…
「しかえし！」
満面の笑みのさりなが目の前に急に現れる。
「っ…爪痛いよ」
「あっ！ごめん！最近爪伸ばしてんの！」
腰が温かくなかったと思っただらさりなの細くて綺麗な手の先にあるラメやらストーンなどでキラキラしている爪が胸元にのびてきた。
「うっわ！すごい！これ自分でしたの？超かわいいー」

さりなの手ごとつかみ爪をまじまじと見る。

ハート、ラインストーン、ピンク…綺麗だな…

さりなは顔も綺麗だし、スタイルいいし、頭いいし…

「そう！頑張ってみた！爪でしょ？髪でしょ？制服でしょ？」

たしかになあ…髪の毛ゆるカールでかわいいーな…

制服もミニスカ、ボタン1つ開けてネツクレスまでしてる…

かわいいー…うわっ！メイクしてんじゃん！！

「がんばってるね！高校デビュー？かわいいー！」

肩に急な激痛が走る。

「ちよつとさりな！いきなり引つ張らないで！どこ行くの！？」

肺が…肺が苦しいよ…

「みくも高校デビューすんの！」

着いた所はトイレ。綺麗だなーここの校舎に憧れて猛勉強したのを
思い出すな。

「いやいや私はいって！中学のまんまでいいのー」

ホント中学の頃からなにも変わってないな…

スカート膝丈だし、ボタンキッチリ閉めてリボンしてるし、髪なん

か三つ編みだし…

「そんなんじゃない男捕まえないよー」

いい男か…ツンツン田村君…ってなんであに人が出てきたんだろ！！

「ほら！こっちきて！みくも興味あるでしょギャル！ね？」

みく (後書き)

やっと続きできましたー！

疲れた…

まだまだ先は長いけど頑張ります！

ゆう　　く出会いく

「おいこう！お前指さされてんぞ？」

「なんだよあの子…昭和っぽくね!？」

まあたしかに…今どき三つ編みって…

「横むいてて顔わかんねーあの子の隣の子の方がかわいいぜ！」

こう…やっぱするどいな。

たしかに横の子の方が今の子って感じだな。

く　く　く

ん？誰だこれ？

「はいはいゆうですけど？」

プープープー

は？なんだよこいつ…

つい舌打ちする。

「あ…おい！ゆう！あの三つ編み…」

肩にこうの手が何度もあてられる。

「んだよ!？今俺イラつい…て…」

さっきの三つ編みの子がこっちを向いていただけなのに俺の体全体に電気が…

10万ボルトが流れた感じがした。

「なんだよ、なに固まってんだよ」

こうが俺の頭を小突く。

「…ん…あっああなんか言ったか？」

「なんも言ってるねえよ!」

かわいいじゃねえか！三つ編みやべーじゃねーか！心臓が止まったかと思っただ…

「どうしたんだよゆう？んなことより三つ編みかわいいな。」

うっ…やっぱりこうも思ってたか…

「俺狙おっかな…あっどっか行っただぜ？」

「テメー遊びなら絶対手ー出すな」

ここのワイシャツの襟を両手でわし掴んで睨みつけた。

「なに？ゆう恋しちゃったの？こつも好きになっちゃいそうなのに

ー

「ぶはつ母さんのまねしてんじゃねーよこんなときに！」

思わずふきだした俺はこつから手を離れた。

「まつ誰かもわかんねえからまだ気にしないでいいじゃん？ほらならぼーぜ！」

「ああ！」

俺は列にならんだ。

でもあの顔が離れない。

三つ編みの子…何組なんだろ…こつともしかするとライバルか…

「おい！今から入学式はじまつから静かにしろ！」

先生らしき男が堂々と俺らの前に立つ。

「んじゃいくぞ！」

先生らしき男を先頭にみんながそろそろ歩いていく。

「なんでこつが俺の前にいるんだよ！」

「別にいいじゃねーか」

みんなの足音にまぎれて俺らの会話が先生らしき男に聞こえたらしい。

「こつゆうはあとで説教な。」

「なんだよこつゆうって！」

「お前ら…さすが双子だな。」

声がそろったぐらいで双子扱い！ムカつく…

体育館に入ると1列に並ぶとちょうど俺から後が体育館入ってねえし！

「秋本太一 1のC 「はい」

「桜田美奈 1のA 「はい」

「田中春美 1のC 「はい」

「永田拓海 1のB 「はい」

どんどん名前とともにクラスが発表され、クラス別の椅子に座っていった。

呼ばれるたびに前に進んでいくから俺はもう暖かい体育館！

ふと後ろを見るとちよつと後ろに三つ編みの子に似た子がいた。

「田村こう 1のB」「んっ」

あの子…絶対三つ編みの子だよな…

「…らゆう 1のB」

髪はずしたのか？黒のふわふわ…メイクしてる…足キレ…ミニスカもくずした制服…

「田…ゆう！」

さっきどっか行ってたとき変えたのかな？同じクラスがいいな…ん？目合った？

「田村ゆう！」

「え！？あ…なに！？」

体育館全体に響きわたった俺の名前に反応し俺は勢いよく前を見た。

「なにじゃねーだろ！返事！クラス発表の途中だぞ！！」

うわやべーめっちゃ恥かいた！見とれすぎてた…

「すみません…」

少し頭を下げた。

「田村ゆう！1のB」「はいはい…」

そそくさと席についた。

「馬鹿だなお前。」

となりに席に座っていたこうが耳元でささやく。

「んだよどーでもいいじゃねーか！」

顔アチーあの子に知られたよな…

後ろを見るとちよつとあの子の番だった。

「杉本みく 1のB」「はい」

みくって言うんだ…

つてまで、ええ！？1のBだって！？うそだろ？同じクラスになれるなんて…

「おいゆうあの子同じクラスだな…俺いけるかも。」
「テメー手出したらぶっ殺す！」
「わかってますよ。冗談冗談！俺は…ほら、あの子と一緒にいた綺麗な子のいいな。名前呼ばれる。」
「山本さりな 1のB」「はい」
「さりなだとよ、こつと合わねえな！」
こつの首に手をかけながら少し笑った。
「テメふざけんな！俺別に女に困ってねえし誰でもいいんだよ！」
こつも笑顔で肩を組む。
誰でもはひどいだろ…
「キヤークラスも一緒だよー！」
「みくとうちやっぱ運命じゃーん！」
すぐ後ろから女子が騒ぐ声が聞こえた。
「さりな、前の人あの人じゃない？」
「ホントだあ！超うれしー」
前って俺かこつだよな…
「ゆう！さりなが後ろにいる！」
こつの髪が頬にかかる。
「お前いきなりさりなって…」
正直そんなことどうでもいい。
今後ろに『みく』がいるんだ。

ゆう　　く出会いく（後書き）

sunny?ありがとうございます??

がんばって1日に2回もの投稿

頑張りました ヽ

超頑張りました

ありがとうーございました!!

みく
く接触く

足が寒い…目変な感じ…髪の毛邪魔あ。

そお、ミニスカ、マスカラ、ゆるカールの髪、1つボタン開け…
さりなの馬鹿…こんな似合わない…

「キヤー似合ってるよみくー！かわいいー！」

ピョンピョン跳ねまわるさりなを見るとちょっと自信がつく。

「えーでも…」

「ほらもう入場してる！行くよ！」

「うん…」

急いで列に戻るとあのツンツン君が前にいた。

「田村こう 1のB」「んっ」

あっあつちがこうか…さりなが気になってる人…

「田村ゆう 1のB」

あの人だ！！ん…？返事ない。

私は列の横からちよつと顔をのぞかせた。

「田村ゆう！」

「あ…」

あの人姿が目に入る。

目…合った？もしかして私のこと見てた？…んなわけないか…

「田村ゆう！」

「え！？あ…なに！？」

ずっと気付かなかったんだ…あの人おもしろい！それにしても誰見てたんだろ…

「田村ゆう！ 1のB！」 「はいはい…」

B組か…ん？私もB組じゃなかったっけ？まさか同じクラスなの！？
つい深く考えすぎて足が止まる。

後ろの人の指先が私の肩に1、2回あたってから気付いた私はそそくさと小走りで前へ詰める。

「杉本みく 1のB」

あ！ほらやつぱり同じクラスだ…やったあ！

「はい」

そっけなく返事をして自分の席に座った。

ちよつどあの人の後ろ。奇跡かも…

「山本さりな 1のB」 「はい」

あつさりなだ！さりなは私の横に小走りできた。

「キヤークラスも一緒だよー！」

「みくとうちやつぱ運命じゃーん！」

さりなとハグする。静かにしていなきゃいけないだろうけど騒ぐ。

「さりな、前つてあの人じゃない？」

こうつていう人を指す。

「ホントだあ！超うれしいー」

さりなのはしやぎようを見てるところがちがばれそつで恥ずかしくなる。

「さ…さりな声大きいっ！」

さりなの耳元で話す。

「あつ！やばい…聞こえたかな？」

さりなも私の耳元で小声で話す。

あの人が…ゆうつて人が前にいる…

どうしよう…さつきからドキドキが止まらない…

「ちよつみく聞いてる？」

「あつごめん！」

さりなの言葉で我にかえつた。

「もーどんだけー！校長の話長くない！？」

お経のように聞こえてくる校長の話し…眠たくつてしょうがない。

「ごめんごめん。たしかに校長語るねえー眠たいよー」

大きなあくびを1つする。

「あーめんどくせー！もう終わるーぜ！」

前にいたゆうつて人がいきなり叫んで席を立つた。

「なんだお前は！田村ゆうだな！いいから黙って席つけ！」
こ、こんな荒れてる人なんだ…

「みくーあの人すごいねー」
さりなの耳打ち。

「うん…こわいかも…」

「たしかにみくは真面目だから男子とのかかわりなかったし、ヤンキー知らないだろーね。」

あきれ顔で私を見てくるさりな。失礼すぎる…でもホントの事だ。
「うっせーよじじい！終われっつってんの！」

「痛っ！…」

いきおいよく前から飛んできたパイプ椅子がすねにあたり悲鳴が出る。
「うわっ！ごめん！俺が蹴ったせいだっ！…」

「ひゃっ！」

ゆうってという人が私の前にしゃがんで私の足に触れる。
初めての経験で思わず声が出る。

「やっ！ちよっ全然大丈夫ですから…」

なんで私敬語なんだろ…

「赤くなってるし！ホントは大丈夫じゃねーだろ？ほら行くぞ！」
ゆうって人の言葉とともに私の体が宙に浮く。

「きゃっおろして！」

お母さん見てるし、先生達も見てるし、みんな見てるし…

しかもゆうって人からお姫様抱っこだなんて恥ずかしすぎるよ…

「いーからだまって」

耳元でゆうって人の声がかすかに聞こえて言うとおりにする。

お姫様抱っこだなんて初めてで正直どう対応すればいいかわかんない…

「こら田村ゆう！他の女生徒に迷惑かけんな！座つとけ！」

先生怒ってるよ…

「見てわかんねえのかよ！こいつの足赤くなってるんだよ！じゃあな

！」

歩きだす…いや走りだすゆうって人…

「どっどこ行くの！？おろして！？」

先生の怒鳴声が体育館を出ても聞こえる。

「いーからいーから。」

ゆうって人の心臓の音聞こえる…ものすごく早い…きついんだろうな…

「も！もういいよ！私重いから！」

きっと私の方が心臓の音おつきいだろうな…

ゆうって人に聞こえる前に早く離れたい。

「さっきも言っただろ？だまって！」

「え…う…うん…」

ゆうって人にのまれていく私。これが恋なのかな？憧れなだけかな？上を向いたらゆうって人の顔がすぐ間近に見える。

綺麗な顔立ち…

つい恥ずかしくなって下を向く。

私のひざの裏と肩辺りに感じる温かさを改めてゆうって人の温かさと思うと体全体に熱がこもる。

「ついた…ほら！」

その言葉と同時に座らされる私の体。

薄ピンク色した小さな花びらが上からどんどん舞い降りてくる。

ごっごっした根が横でしっかりはっている。

そう…

着いたのは学校1の桜の木の下。

みく 　↳ 接触↳ (後書き)

ところどころ字間違えてるかも…

ご了承ください

まだまだ続く!!--こつこ期待!?

衝動的に俺はみくって子をかつき走っていた。

みくって子におろしてって何回も言われたけど俺はおろす気はない。

「も！もういいよ！私重いから！」

そんなこと思ってたねえよ！ただ今はみくって子を1人占めたい。

「さつきも言っただろ？だまって！」

つい強く言ってしまった。傷つけたかな？

少し下を見るとみくって子の顔が近くにあることに今さら動揺する。さつきから気が高ぶって静まりそうにない。ヤベー俺。どうしたんだろう…

体が密着しているせいかかっいでいる手が震える…

「ついた…ほら！」

みくって子をおろす。根と根の間に…

着いたのは学校のド真ん中にある桜の木だ。

あのパイプ椅子をあててしまった時どうしてもここに連れてきたかった。

「スゴイ…満開だ…」

みくって子が少し驚いたような顔で桜を見てる。

両手を前に差し出し花びらを集めてる姿を見ると抱きつきたくなる。

「あの…さつきはぶつけて悪かったな…」

みくって子の隣に座って頭をかきながらみくって子の方を見る。

「全然いいのに！そ…そんなことでこんなことまで…」

「いいんだよ…俺が連れてきたかったんだ。」

「え？…」

なんだよ…どーすればいいか分かんねえよ…

初めての感覚で思考回路がまわらなくなる…

「な…名前なんていうん？」

とりあえず知ってることを改めて聞いてみる。

たったこんだけのことなのに顔が熱い…

「杉本みく！…っていうの…」

ヤバっかわい…照れてんのかな！？ほっぺ赤い…

「か…漢字は？」

「杉の木とかの杉に、本棚とかの本…」

「あははは名字かよ」

「え！？違った！？どうゆうこと!?!？」

慌ててみくって子を見て笑いが出る。

鈍感…ってか今って感じじゃないな…

「こうゆうときは普通下の名前だよ！」

手で頭をおさえて笑いながら教える。

「え！？そうなの？え…えっと下は…美しいの美と紅白の紅…」

「美紅…」

自然と美紅の頭に手をのばし黒くふわふわした髪に触れる。

「ひゃっ！…って名前…呼び捨て…」

自分の髪をおさえて動揺している美紅がかわいくてしかたがない。

「駄目？」

美紅の目をまっすぐ見て問いかける。自分の気持ちの抑えが効かな

い…

「い…いいけど…」

「やった！俺はゆうでいいから！」

まさかOKもらえるとは思ってなかった…うれしすぎて心臓が止ま

りそうだ!!

「ゆ…う…ってどんな…字？」

美紅が俺の袖の端を引っ張る。

肩に美紅のぬくもりを感じる。

「夕日の夕…」

言うのめっちゃ恥ずかった。なんだよ…一体…

「そうなんだ！じゃああの双子のこうっていう人は？」

え？な…なんでここの事が出てくんだよ…

まさかここの事が気になってんじゃない…

「こ…ことう？ことうは日光の光っていう字…」

美紅を見ると笑ってた。まさか…

「夕と光ってなんか名前かつこいっていつか、さすが双子って感じだよ！」

「あ…ああ…」

気になる…美紅と光の事が…

美紅は光の事…気になったりしてないよな…

「そういえば美紅と一緒にいる大人っぽい女子なんていう名前？」

光の事を紛らわすために話しをそらす。そうでもしなきゃ…

「え？…さ…さりなのこと？」

「ああ…なんかそんな感じの…」

「さりなは花が咲くの咲に理科の理、奈良の奈で咲理奈だよ…」

なんか美紅急に元気なくなったような…

「咲理奈か…」

そう言いながら俺は立ちあがった。

美紅の前に手を伸ばす。

きつと具合悪いんじゃないかな…

「なに？」

ホント鈍感ってかなにも経験してないんだな…

「行こ！入学式途中だったじゃん？つかまって！」

「あ…ありがとう…」

俺の手に美紅の手が重なった瞬間俺は一気に舞い上がった。

「まだ手つないでるの？」

体育館へと歩き始めた俺は美紅の手がどうしても離せずまだしっかり握っていた。

「ああ、今は離したくない…」

「え？そんな…」

なんだよ…俺と手繋ぐのは嫌なのかよ…

光の事を聞いてから、彼女でもない美紅の事の嫉妬でおかしくなってる…

「なに？俺と手繋ぐのは嫌なの？」

終えは振り返り、美紅と向き合った。

美紅はかなり驚いていたけど俺は続けた。

「繋ぐの嫌だったら今繋いでるこの手を美紅から離せよ！」

美紅には刺激が強かったかもしれない…

でも俺ははつきりしたい…

「ごめん…私よく分かんないの…なにもかも初めてだから…」

美紅がそういうと俺の手のぬくもりが消えた。

「そっか…それが美紅の答えか…」

俺は前を向いてまた体育館へ歩いた。

俺だけだったんだ…俺だけ舞い上がった…

やっぱり美紅は光の事が…

「まって！でも私ホントに分からないだけなの！」

俺の腕が後ろに引っ張られる。

「おう…分かってるよ…美紅もはや戻れよな」

乱暴だったけど腕を振り切って俺は体育館へと向かった。

だって…だって美紅は俺じゃない…別の…光の事が…

ゆう 〽感&漢〽 (後書き)

お腹すきながらも頑張りました(？^|^？)
最近パソコン打つのが早くなったな…笑
がんばります？

美紅 　　く初失想く

「美紅…」

いきなり下の名前呼ばれてびっくりした…

髪にゆうの手が触れる。初めて父親以外の異性に触れられてさっきから心臓が爆発しそう…

「ひゃ！って名前…呼び捨て…」

ゆうに触れられた髪の部分に焦って触る。

「だめ？」

ゆうの方を向くとゆうの真っ直ぐな目が目の奥を刺激する。

ホントに刺激されてるか分かんないけど私には今、自分がどんな感情なのか分からない…

「い…いいけど…」

ゆうの言葉に逆らえない…

男子に下の名前で呼ばれるのは初めてで呼んでほしくない面もあるけど…

ゆうにはなぜか呼んでほしいと思った…

「やった！俺はゆうでいいから！」

ゆうの満面の笑みを見ると目が離せなくなっちゃう…

こんなに近くで心臓の音聞こえないかな…

「ゆ…う…ってどんな…字？」

ゆうって口にした瞬間なぜかゆうがそのままどこかに行きそうで袖を引っ張ってしまった。

こまっただろうな…

「夕日の夕…」

夕日の夕か…なんかかっこいいな…

名前の漢字を聞いただけで顔が熱くなる…

「そうなんだ！じゃああの双子のこうっていう人は？」

なんか話をそらそいと思つて双子の話も兼ねてみたけど失敗だったかな…

なんか夕怒ってる？夕の顔が急に真顔になったような…

「こ…こっちは日光の光っていう字…」

「夕と光ってなんか名前かっこいいっていつか、流石双子って感じだよね！」

怖くなつて無理に笑つて気のきいたことを言つてみたはずんだけど…

「あ…ああ」なんてそっけない返事だったな…しかも微笑んでもくれなかった…

次にかける言葉がない。怖くて怖くてこんな感情初めてすぎて全然分かんないよ…

「そういえば美紅と一緒にいる大人っぽい女子なんていう名前？」
気づいてしまった…違った…私じゃなかった…

「え？…さ…さりなのこと？」
さりなつて分かつてる。わざわざさりなのこと？って聞かなくたって…

違ったの。私が舞い上がったの。私に近づいたのは私じゃなくてさりなに近づくための…

「ああ…そんな感じの…」

そうだよな…今まで誰も近づいてこなかった私にこんな人気者でかっこいい夕が近づくわけないもんね…

「さりなは花が咲くの咲に理科の理に奈良の奈だよ…」

「咲理奈か…」

よ…呼び捨て…そ…そあだよね！咲理奈が目的だしね…
わ…私が馬鹿だったんだよな…

気が狂いそうで涙が今にもこぼれ落ちそうで私が今どんな表情をしてるかも分からない…

なにこれ…苦しい…

夕の方から顔をそむけても夕が立ち上がったのが分かった。

「なに？」

急に目の前に伸びてきた夕の手にびっくりしてつい声が動揺したよ
うな声になる。

いや…今の私はものすごく動揺してる…

「行こ！入学式の途中だったじゃん？掴まって！」

そっか…もう情報聞いたし…戻るんだよね…

「あ…ありがとう…」

そういつて夕の手を取ったけど取って良かったの？

夕が考えてる相手は私じゃないのになんでそんなに優しくしてくれ
るの？

私が夕の手に触れたとき、夕がビクついていたのはきっと…ホント
は触れたくもなかったから…

ん？私が立ち上がるために手を貸してくれたんだよね…

「まだ手繋いでるの？」

私が立つてからも夕は手を離してくれない。

離してほしくないけど夕が想ってるのは私じゃないでしょ？

そう聞きたかったけどこんなこと初めての私にそんな勇氣ない。

「ああ、今は離したくない」

「え？そんな…」

そんなのダメだよ…だって私じゃないじゃん…咲理奈に見られたら
誤解されちゃうよ？って言いたかった。

でもどうしてもその言葉がだせなくて、ホントにそう言ったら私の
こと、ホントに見てくれなくなる気がして…

「繋ぐの嫌だったら今繋いでるこの手を美紅から離せよ！」

「ごめん…よく分かんないの…私なにもかも初めてだから…」

夕の手が私の手から離れた。…違うの…私から離したの。

ホントはずつと繋ぎたい。このまま夕にのまれていきたい。

でもふと頭に浮かんでくるのは…咲理奈…

もうなにもかも分かんないよ！泣き叫びたいくらい苦しいよ！

「そっか…それが美紅の答えか…」

夕は怒ったように歩いていく。私怒らせたの？…こんなんで終わらせたくない…

そう思っただけで夕の腕を引つ張っちゃった…

「おう…分かってるよ…美紅もはよもどれよな…」

勢いよく夕の手の温もりが消え去った私の手は力なく床に落ちた。足なんか振り切られた瞬間力が入らなくなって崩れた。

嘘…ホントに分かってるならもっと優しく接してよ…これが男の子の普通なの？

床が冷たいよ…

こんなことならスカート短くしなければまだ良かったかな…

こんな格好したって私は私…変わらないよ…夕に似合う女の子なんか…

「あ…」

スカートに染みがたくさんできていることに自分でも驚く。

ほっぺがいつの間にかびしょびしょで、ワイシャツもびしょびしょで…

今日初めて着たのにもうこんなに汚れちゃった…

「こんなところ…」

見られちゃいけない…そう思って私はふらふらの足をしっかりと地につき、目的地もなく歩いた。

自分では真っ直ぐ歩いてたつもりなんだけど気づいたら足や肩、いるんなどころに痣ができていた。

壁にぶつけた痛みなんか感じてないよ。

だって…夕と離れてしまったことが痣の10倍…100倍…いや何千倍もつらい…痛い…苦しいよ…

「美紅…ちゃん？」

私の肩にもものすごく温かい…ずっと今まで感じてきた温もりが体中に光の速さのような行き渡った。

「おか…さん…」

後ろから感じる温もりの方を勢いよく向くと思いつきり抱きついた。

うん…この温かさ…おの温もりが私には1番だ…

夢見てた。彼氏とか私が考え始めるのは10年早かったんだ…

「ずっと帰ってこないから心配して…あの男の子は帰ってきたけど。」

「

「うっ…うう…ぐすっ…」

そっか…やっぱり普通に戻ったんだ…咲理奈のところに…

「ちょっと美紅ちゃん？どうしたの!？」

お母さんの服の色がどんどん濃くなっていた。

美紅 　　く初矢想く（後書き）

やっと書き終わりましたよ

長かったす

読んでくれてありがとうございます

夕　　くどくどまらない思いく（前書き）

おとなしめの美紅。

やんちゃ系の夕。

一見穏やかな物語。

しかし2人の物語は穏やかならぬものだった…

夕　　くどまらない思い

俺はもう抑えが効かない…

なんかわかんねえよこの気持ち…ただ2人が付き合ってるって知っただけで…

「テメエ！いきなりなんなんだよ！」

光が右手の拳を振りかぶったと思っただら頬に激痛が走った。

「俺は…俺は…光…お前が…うらああ！！」

それから数分光と俺の怒鳴り合い殴り合いが続いた。

ただ俺は光が美紅の気持ちも知らずにのうのうと咲理奈って女と付き合ってたのがムカついたんだ。

美紅が好きだ…今日分かった。一目惚れ…したんだ。

でも美紅は光が…光のことが…なのに光は…咲理奈って女と…

ああ！なんだよ！もうわかんねえよ！

こんな感情初めてだ。今まで多くの女と付き合ったけどこんな感情一度も無かった。

これがホントの好きっていう気持ちなのか！？　そんな思いを拳に変えて俺は光を殴り続けた。

俺も痛えよ…たしかに光は俺よりかっこいいし、強いかもしれない

…でも今は光なんかを負けたくねえ！勝ちたい…この喧嘩に勝つても美紅が手に入るわけじゃねえけどこの喧嘩は光に勝ちたい

…と思っただ。

そうすれば美紅が手に入る…俺のことは見てくれる気がしたんだ

…いきなり手首を後ろから掴まれたと思っただら動けなくなっていた。

「離せ！離せよ！！」　散々暴れたけど下から脇、肩にまわった誰

かの腕で一步も動けねえ…

ふと気づいたら光が担架で運ばれていた。

「田村 ターやり過ぎだ。」

耳元で後ろから聞こえた声はさっきまでクラス発表をしていた先生だった。

俺は気づかないうちに光を病院送りまで痛めつけてた。感情が過ぎた。

「最っ低！あんたと仲良くなるうと思っただのに…あんたなんか退学になっちゃえ！」

細くて長い爪を持った手のひらが俺の頬を貫く。

「さ…咲理奈…ちゃん？」

なんで俺が咲理奈って女に殴られた？

「名前一生呼ばないで！あとあたしに近づかないで！あと光にも！

…そして美紅にも！！」

「えっ…」

咲理奈って女が勢いよく光の後を追いかけるのが見えた。

「もういい！お前は1週間謹慎だ。今すぐ家帰れ！母親には俺から言っとく」

嘘だろ！？1週間も美紅と会えないのか！？ 早く光の事ちゃんと知りたいのに…

「おい！聞いてんのか！？」

「んじゃ離せよ！」

脇から肩にかけてしつかり俺を捕まえている先生の腕を強く振り切ると足元に置いていたバツクを取り勢いよく外に出た。

くそっ！なんで俺がこんな目に！ しかもあの女…美紅に近づくなだ…なんなんだよ…

家に入るとバツクを床に投げ捨ててベッドに寝転がった。

はあ…美紅に会えないのはツライな…

「ん…今何時？」

俺はあのまま寝てしまったみたいだ…

「はあ！？3時！？」

俺は1日も寝ていたのか!? 俺は慌てて制服を脱ぐとダボダボのGパンと半袖Tシャツを着ると長袖パーカーを羽織った。

「ター!いつまで寝てるのー?」

「もう起きてんだよ!」

小さくこもり気味な母の声に乱暴に答えると、お気に入りの香水を少し首元につけた。

プルルルルル ン?誰だ?

「はい…」

「はい!夕!元気?あたし!」

げっ!元カノさん…いや切っちゃお…

「じゃばいばい」

そう言つて俺は携帯の切るボタンに指を伸ばした。

「あ!ちよつと待つて!今日は用事があるんだって!」

「なんだよ」

「あのね、光の好きな食べ物って分かる?」

ん?どういう意味だ?まあ…いいや…

「あーカレーだな」

「ありがとおー!」

甲高い声が耳の鼓膜を刺激する。

「なんで?」

「あのね、今あたし光と付き合つてんの!!夕から乗り換えたのー!」

ああなるほど…だからテンションが高いんだ…つてええ!?

「おい!奈々今なんつた!」

携帯が壊れそうなくらい携帯に力を込め、つい息が荒くなる。

「え?光に乗り換えたつて…そんなにあたしが夕から光に移るのが嫌だった?もしかしてまだ好きだったの?」 なんなんだよこの女…イライラする…

「でもあたしはもう光だけがー」

「いいかげんにしろ!この馬鹿!俺は今好きな女いるんだよ!」

「あつそ！ぢやまたHしてねん！ばいばい」

こ…こいつ…

「誰がするか！」

ブチッ プープープー なんなんだあの女…

携帯を壊しそうなくらい自分が動揺しているのが分かる。

光…どういうことだよ…咲理奈ちゃんと奈々…二股してんのか…？

俺の体の中でなにかの渦が渦巻いている…

嫉妬…二股の事…怒り…そして美紅の事…

「はあ…気晴らしに公園行くか…」

そう言つて俺は3分で歯を磨き外に出た。 冷たい風がビュービュー

ー吹いている。

「うお…さみい…」

やっぱり美紅に会いてえ…今頃学校か… 公園まで歩いていく途中コンビニに寄つてHOTコーヒーを買 った。

「あーあつたけー」

缶コーヒーを両手で包んで温まりながら歩いた。

あつこの公園すべり台できたんだ… 久しぶりに来た「東公園」に

は餓鬼用の象みたいなすべり台だ けがポツンと立っていた。

ベンチが2つ、前からあつたけどベンチも1つに減っていた。

ん？ベンチに誰がいる…まあいいや。隣座ろ！ そう思いながら俺はベンチへ歩いていく。

一歩一歩歩く度にその人から目が離せなくなる。

ベンチから約5メートル離れたところで確信がつく。

「美紅…」

俺は自然と声が出ていた。

「え！？夕！？」ガタッ

「うお！危ね！」

ベンチから落ちそうになった美紅の手の温もりが俺に伝わる。

「あ…ありがとう…」

少し膝をかすつたみたいだけどなんとか美紅がこけるのをまのがれた。

俺が美紅の右手を掴んで勢いよく上に引つ張つたもんだから、美紅が肩を痛がつているのが針のように俺の心を刺す。

「おい！膝血出てんじゃん！なんで言わねんだよ！」

美紅を座らせて膝を見る。

俺がしゃがんで足を上げた瞬間美紅の体がビクついたのが分かった。

それに頬は赤いけどそのビクついた目と動揺しているような口……なんだよ……俺に触れられるのがそんなに嫌なのかよ……

「だ！……大丈夫だよ。なんともない……」

「すぐ消毒しなきゃ！ばい菌入る！行くぞ！」

そう言つて美紅の手をとつたが美紅は動かない。

「どうした？」

手から美紅のぬくもりを離さずに美紅の顔を見て苦笑いをした。ホントはちゃんと笑つて明るくしてあげたかつたけど今の俺にはどうもできない。

「どこいくの？」

美紅がこつちをちゃんと見て分かった。

泣くほど……嫌か……

「お、俺んち……」

さつきから嫌なことばかり頭にでてきて美紅とコミュニケーションがとれない。

「い……いかない。」

俺んちと聞いて美紅は立つたけどしばらくしてそう言った。もうダメだ……抑えがきかない。

「やっぱ俺といるのは嫌か？俺と関わるのはやっぱ嫌か？それとも2度も傷つけた男は怖いか！？どうなのか教えてくれ……」

夕 くとどまらない思いく (後書き)

かなり投稿が遅れました…

美紅 く抱えた思い

「どうなのか教えてくれ…」

そんなんじゃない…。私はそんな こと全く思っていない。

でも私には夕が私にかまう意味がわかん ない。

やっぱ怒ってんのかな…夕の目が怖い…

「美紅？なんで 黙ってんの？」

「あ…」

話さなきゃ…話さなきゃ…話さなきゃ！…でも。

気づいたら私は立ったまま涙を地面に落としていた。

「美紅」

名前を呼ばれた瞬間体がほんわり温かくなる。

夕の手 が私の体を包む。夕の心臓の音が間近で聞こえる。

「もういい よ…そんなに泣かんで。分かったからもう…俺が悪かった。俺 のせいだよな…」

少し夕の手に力が入ったのが分かった。

涙が 止まらない。私の涙は夕を少しずつ確実にぬらしてる。

ダメ！ このままじゃ…夕の手の力が少し緩んだ。

私と夕の間にできた 隙間に冷たい風が入りこむ。

「違う！」

咄嗟に私はそう叫び夕 の脇腹らへんの服を引っ張った。

「美紅？」

私と夕の間に冷た い風が入らなくなる。

「ちがうの…夕のこと嫌なんかじゃない ！」

「え？」

「…好きかもしれないの…夕が…」

自分が恥ずか しすぎて壊れていつてるのがわかる。

「ホントなの…のか…」

言 っちゃった…夕は咲理奈が好きなのに…ごめん なさい咲理奈、

夕…

「でも美紅」

「うん！わかってる！夕が咲理 奈のこと好きで私に告白されても迷惑で

私に優しくしてくれる のも咲理奈の友達だからってだけで」

「美紅…」

「そんなんで 好きになっちゃいけないって分かってるのに好きになっちゃって…」

もう！何言ってるの私…もう…こんな私じゃないみたい！」

「美紅ちよつとまって…」

「でも私は…！！」

体の中身が全部 でそうなくらい夕の手が強く私を包む。

どうしよう…私…とん でもないこと叫んじゃった…夕怒ってるよね…

「美紅…もう一 回ちゃんと話して？ちゃんと2人で話そう」

なんでそんなに優 しいの…

「うん…分かった…」

「ベンチ座ろ…」

私と夕は冷たいベンチの上に座った。

夕のぬれたTシャツとパーカーがもう しわけなく心を貫く。

「ほら！話して？」

夕の笑顔で私は落ち着 き話すことにした。でもなんで私に…そんな笑顔…

「私ね、夕 が好きなの…」

「ストップ！それホント？」

夕の手のぬくもりが 肩に服の上から伝わる。

「う…うん…」

顔が熱い…

「…まつ… まあ続けて」

夕怒ってるの？夕のほっぺが赤い…

「でも夕の好きな人は咲理奈でしょ？」

怖くなって夕から目：そらしちゃった…

「は？どういうこと？ 誰に聞いた？」

「入学式の日：私だけだったのに：咲理奈のこと聞かれたからそうかな…って…」

夕の目を見たけどすぐそらしちゃった。

「それはちがう…」

「え？」

夕の言葉に驚き、つい夕の目を見てしまう。

「俺は…美紅が好きだ」

「……」

夕から目がそらせない。そらしたくても夕の目が力強く私の目を見てる。

嘘でしょ？夕が私のことが好き？

そんな…ありえない…

「う…嘘だ…」

つい声が出ちゃった…

「な…なにいつてんだよ！ ホントだよ！」

私のベンチにあった左手が温かくなる。

「俺は好きな女にしか抱きしめたり手繋いだりしたい。信じてくれな い？ やっぱり…」

左手に圧力がかかる。

顔が燃えてるように熱い…ホントなんだ…ホントにあの夕が私のこと…

「し…信じるよ」

左手の圧力がさらに強くなった。

「ホントか？」

夕の顔が真っ赤だ…これは怒ってなかったんだ。

「ホントだよ」

なんか変な気持ち…幸せっていうのかな？夕がぼやけて見える…

付き 合ってないけどなんか気持ちに通じあっただけで心がポカポカする…

夕と付き合えたら私は どうなるだろう…

「泣くなよ…」

いつのまにか流れていた涙を夕の親指がぬぐう。

「あつ…ありがとう」

夕の顔が赤くなって たのはやっぱり恋なのかな…

「美紅1つ聞いていい?」

「何?」

なんだろう?なんかちょっと怖いかも…

「光のことどう思う?」

「え?」

なんで光って人がでてくるんだろう…っていつか夕の 顔なんか怖い…

いきなりの質問に戸惑っているのが分かる。

「 どうなんだよ!?」

夕の手のぬくもりが腕に伝わる。

ちよっと痛い…なんか怒ってる?

「そ…そんなどうって…なんも思ってたない…よ…あ!あえていうなら夕の双子?」

無理な苦笑いをし、ちよっと明るく振る舞う。

だってこうしなきゃ怖いんだもん。

「 ……よかったー。ホントだろ?」

夕の満面な笑顔に緩んじやう。

こんな夕が私のこと好きなんだよね…うれしい…

美紅　　く抱えた思いく（後書き）

学生つつつのは不便ですよね
ろくに小説もかけない…
こんな簡単なる言い訳っすね
正直に遅れてすみません！！

「うん…」

あ…美紅ほっぺ赤い…

ってかそれ以上に俺体が熱い…

ホントなんだ。ホントに美紅は光じゃなくて俺のことを…

「あ…あのさ…美紅。付き合っつてどう思う？」

美紅の手の上に自分　の手を重ね、美紅ではなく前を見つめる。

面と向かつては言い　きらなかった。

「え？私はどこでも付き合っつよ…」

その場に俺　の笑い声が響いた。

「え！？な…なに！？」

美紅はキョロキョロしながら目をまん丸に開いてる。

そうきたか…ホントに恋愛経験　無いんだな…

「ちがくて、彼氏と彼女の付き合っつ！」

目に前の　木がポツリとある風景ではなくて美紅の赤い顔がうつる。

「あ…それは…」

「美紅？…美紅！！！！」

耳に遠くから美紅の名前が　入ってきた。

スゴい足音とともにドンドン影が迫ってくる。

「ちよつとあんた！どうゆうつもり！？」

肩にぬくもりを感じた瞬間　激痛が走った。

今まで美紅の方を向いていた体が近づいてきた　影の方を向く。

「美紅に会わないでっつて言ったでしょ！？」

「ち　よ…ちよつと咲理奈！？なんでここに！？」

そこには制服姿のあの　女が立っていた。

結構走ってきたんだろっつな。息の荒々しさが　伝わってくる。

「美紅！ほら行くよ！」

咲理奈っつて女が美紅の手首を引っ張り

スタスタと公園の出口に向かっていているのを俺は止められなかった。なんなんだよ…なんでここにいるの知ってたんだよあいつ！でも美紅を簡単に行かせた俺が1番情けない。

公園に1人ぼつちの俺に冷たい風が見下すように当たる。それから俺はずっとベンチに座っていた。

美紅の事を考えながら…

「ん？…」

ベンチにだらんと腰掛けていた俺の目に公園の入り口らへんで光っているものが入った。

重い体を光るアレを拾いたい一心で立ち上げた。

ベンチの温もりが消え、一気に寒さが体の芯まで迫りだす。

「携帯か？」

薄ピンクの携帯が砂に埋もれながら太陽の光りを弾き返している。拾って携帯を開くと『新着メール1件』の文字が目にとまった。

開いてみても…いいよな？だ…だ…って…それで持ち主分かるかもしれないし…

親指にボタンがへこむ感触が伝わる。

「こ…これ…」

from 咲理奈

件名 誰かさん

本文 このけいたいはあたしの友達の杉本美紅のものです。

見つけられた人は午後17時に東公園のベンチにとりに行くので置いて下さい。

美…美紅があるとき忘れて…嫌…落として…いったんだ…

…！！あと少して17時やんか！

「おいとくか…」

ベンチに携帯を置く。

ベンチに触れた指先は赤く冷えきっていた。

どれくらい外にいたんだろ…

「……………」

どうしても美紅の 携帯から離れられない。

これからどうすれば美紅と話せるだろ う…やっと気持ち伝わったっていうのに…

くそっ！あの女さ えいなければ…

「うぐっ…」

ベンチ足の鉄の重みが俺の骨に衝撃を与えた。

イライラがつのりベンチを蹴ったが力加減が出来 ていなかった。

「携帯あるかなー？」

「あつてほしいよー！」

や ば！きつと美紅達だ！

俺は逃げるように公園のコンクリートの壁 を乗り越え走った。

「うがっ！！」

公園をでるときは必死で気づ かなかつたが走るのが落ち着いてくると足に焼けるような痛みが走った。

くそっ…なんなんだよ…痛え…イテエよ…

それでも 俺は足を引きずりながら家へ向かった。

ドアを開けた瞬間温か い風が体を包みこむ。

「もう夕！勝手にでていくんだから心配 したでしょ！？」

母さんの怒鳴り声が耳に響く。

「でも…もう限 界…」

一瞬頭の中がクラツとしたと思ったら

玄関のタイルの冷たさが顔に、重力に負けた体 に痛みが走った。

「夕…！！」

そのとき最後に聞いたのがその言葉 だった。

俺はどうなるんだ？真っ暗だ…何も見えねえ…あつ… 美紅…美紅だ！

なぜか目から美紅の姿が遠くなる。どんどん姿 が見えなくなる。

「まって！まってよ！美紅！！」

「夕？夕！しつかり！！」

「えっ……」

白い壁…白い布団…白いカーテン…どこだココ？

「先生！！先生夕が目を覚ましたわ！！」

母さんの声が耳に響く。

ん？なんだこの包帯…

「夕！あんた家で倒れたのよ！！」

「なんで？」

すると母さんは俺の足に手を伸ばした。

「いつつつてえつつ！！！！」

包帯が巻かれた足に激痛が走る。

一気に目頭が熱くなった。

「そういうこと！あんた骨折してんのよ…ホント馬鹿なんだから…」

ま…まじか…きつとあのベンチ蹴ったときだよな…

「なにしてたの？しかもその足で家にもどってくんだから…」

「え…？えつと…」

言えるはずねえよんなもん！

「それとね夕くん…君の足は複雑骨折だから治りが遅くなるんだ

よ」

「え！？」

学校は行けんだろうけど美紅のもとには自由に行けねえじゃん！！

蹴っただけなのに！

「つてかあんた誰？」

「あつ！言うの忘れてたね。私は杉本健一郎。君の担当医さ！よ

ろしく！」

「す…杉本！？」

夕　　く複雑く（後書き）

今回はスチャットとできました
なんかスカッとした気分です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9553r/>

cherry blossom

2011年10月8日22時12分発行